

## 山城祥二とは何者か

本田 学

組頭・山城祥二こと大橋力の活性の全体像を捉えることは、容易ではない。しかし、少なくとも2つの切り口からのアプローチが役に立つことは間違いない。そのひとつは、山城のアクティビティが、現代の自然科学のいくつかの専門領域、そしていくつかの人文科学をカヴァーし、しかもそれぞれの分野において抜kindでたレベルを実現していることだ。

詳細は業績リスト(SYNDICATE)に譲るが、例えば研究面では、〈ハイパースニック・エフェクト〉を発見、そして芸術面では、アニメ『アキラ』の音楽で世界的な人気を博している。1個の頭脳がカヴァーするものとしては破格の広さと高さである。ここに象徴される活性の全方位性とそれぞれの質の高さが、第一の活性像を構成している。

もうひとつの活性像は、知的活動を加速する新しい「概念道

具」を発明する名手、おそらく天才であろうことだ。そのハイライトとして、彼の創った〈本来〉という生物学の概念道具に注目してみる。地球生命のそれぞれの種は、己が進化的適応を遂げた特定の環境とあたかも「鍵と鍵穴」のようにぴったり合った活性を、遺伝子レベルで実現している。こうした「特定生命種と特定環境との特異的かつ全面的な適合状態」に対するこれまで空白だった科学的概念道具として〈本来〉(デフォルム)を構築した。

現代生物学では、学習や経験によってできなかつたことができるようになる〈適応〉現象が研究者の関心を集めてきた。現代生物学は適応の生物学ともいえる。これに対して山城の発明による〈本来〉という概念道具は、

「あるがままの生命とあるがままの環境とが美しく調和した生き方」を示した。それは現代生物

学に由来する「生きること、困難に耐え、努力し、克服し、自分を造り替えること」という偏った生命観から人類を解き放つ。

その他に、〈もつとも貴いもの地球〉〈プログラムされた自己解体〉〈生命文明〉〈利他の惑星〉など、山城によって発明された概念道具は、(それが山城の発明であることを知らない人をも含め)多くの人の知的作業に量り知れない恩恵をもたらしている。

山城が生み出すこうした概念道具に共通する特徴は、何か新しいものを造り出すのではなく、埋もれている実体や真実を「掘り起こす」点である。掘り起こされるまでは誰も想像すらしないのに、いったん掘り起こされるとあたかも最初からそこにあったかのように、当たり前で自然に感じてしまう。

以上は通念の枠組で捉えやすい山城の活性像である。しかし山城には、彼の身近で彼と一体化して長い年月行動してきた人

間でないと知ることができない不思議な活性が、きわめて稀にはあるが顕れる。その驚きに験者の一人として証言することは、自分の使命と考える。

まず、私自身が遭遇した象徴的な出来事について、具体的に述べる。その頃、私たち文明科学研究所の研究チームは、人類発祥の地アフリカ、カメルーンの熱帯雨林で今も狩猟採集のライフスタイルを堅持するピグミーさんたちが、どんな環境の中でどんな暮らしをしているか調査していた。日本の何十倍も面積をもつ密林で移動生活をしているピグミーさんに出遭うことは、グラウンドに落ちた1本の針を探すより難しいといわれている。そんな日々を送る2009年8月14日のこと、山城はかろうじて自動車を通れる道すがら見出した何の変哲もない1本の小径に注目し、「あの道の奥にピーちゃんのニオイがある」と突然言い出したのだ。これには現地のコーディネーターも

驚いて、付近にピグミーの村があるとは聞いていないと断言する。しかし山城はゆずらず、後を追って2キロ足らず進むと、木立の間に葉っぱの家からなる集落が忽然と姿を現したのだ。問題は、このときどうやってそれを見抜いたのか、山城本人にもまったく解っていないのである。「途の探索」という〈未知〉の範疇下にある彼の脳の思考・行動の過程に、〈既知〉と区別のつかない状態で「仮想的な途の情報」が介入し、置き換わって



しまっていた。しかもそれが実体を正確に反映していた。という、理解不能な現象が顕れたのである。

本人にインタビューすると、その内容は「デカルト的明晰判明知」を構成し、離散性有限性が明白で曖昧さはまったく認められない、という。この点で、いわゆる「既視感(デジャヴュ)」とも一致しない。この新たに知られた脳機能に対して、山城は、『**仮想既知覚**』という新しい概念道具を創り対応させている。

こうした不思議な現象は、「奇蹟的」と呼ばれるようなさきわめて低い確率で人類の脳に惹き起されるのかもしれない。ところがこの奇蹟のような現象が、山城には再現しているのだ。私自身はビッグミーさんの件を含め都合3回にわたって、それを体験している。

そのもうひとつの例は、「耳で音として感じる」ことができず、高周波を、身体の中で感知しているのか? というハイパーソニック・エフェクト最大の謎に答えを出した実験である。山城は、

それを「体の表面である」とする(仮想既知覚)から導いた図に示す4つの実験から、ほぼ完璧に証明している。ここで注目すべきは、実験計画が「必要なものをすべて含む」と同時に「不要なものひとつも含まない」というデカルト的明晰判明知の構造を具現しており、山城の(仮想既知覚)のもつ「正確性」を反映している。

さらなるもうひとつは、生物が不適合な環境に遭遇すると、自らを解体して土に還す(プログラムされた自己解体)が地球生命に実在することを実証した

実験。単細胞生物「テトラヒメナ」のDNAに、「生きるのに不都合な環境」を出遭わせ「引導」を渡した後、直ぐに最適環境に戻すというやり方で自己解体は一斉に起こる、という閃きとして介入してきたのがこの時の(仮想既知覚)の骨子だ。実験の結果、山城の予言どおりテトラヒメナは見事に自分で自分を溶かしてしまっただ。

これらに共通するのは、通常の科学研究では定石とされる先行研究の調査どころか、試行錯誤のパイロット実験すら実施せず、いきなり核心を突く実験だけが行きわたっていることだ。本人にインタビューしたところ、こうした脳の働きは、自覚的にはまったく制御できず、非常に稀に、天

命に実在することを実証した

このような山城の脳は、ホモ・サピエンスの「正常」から少なからず逸脱している。それを「病理」として捉えるか、「進化」または「退化」の尺度で捉えるかは、無視できない課題だ。私見を述べた地球史的な重みを感じる。山城が

### 超高周波の体表面受容を突きとめた4つの実験



非常に稀に、天与のごとくいつの間にか恵まれている、ということだ。しかし身近にいと、山城がこうした(仮想既知覚)を「不可視のレベルで平素からミクロに發揮しているのでは…」という感覚を否定することができない。厄介なのは、このような山城がどう見ても「普通の人」の佇まいをたたえていることだろう。ケチャまつりでは、音響卓を採用する山城をスタッフと勘違いして、演目の開始時刻を尋ねる人も多い。情が深く義に厚い。食いしん坊で美味しいものを見つけた情熱と才能は当代随一。その結果、多くの人にとって、山城と自分との距離を実感しにくいことは、私の経験から指摘しておくべきだろう。あたかも遠くの大きな山が近くに見えるように、手が届きそうなのに近づけば近づくほど遠ざかるのである。

# 続・山城祥二とは何者か

本田 学

今年のケチャまつりパンフレットに掲載された「山城祥二とは何者か」という小論考の中でも、とりわけ反応の大きかった「〈仮想既知覚〉」について、さらに掘り下げて考察するにあたり、まず先の論考を簡単に紹介する。山城祥二こと大橋力の活性化の特徴として、そのアクティビティが自然科学・人文科学の壁を軽々と超える拡がりと高さを併せもっていること、特筆すべき活性として、知的活動を加速する新しい「概念道具」を發明する天才であること、などが挙げられる。しかし、こうした通念で捉えやすい活性化像に加えて、それらとは大きく位相を異にする不思議な活性が存在する。たとえば広大無辺の熱帯雨林の中で現地のガイドすら知らないピグミーさんの集落の所在場所を予見したり、常識外れの結果を予知していたとしか思えない実験デザインを、最初か

ら設計するなど、「未知」であるはずの思考・行動の過程に、「既知」と区別のつかない状態で仮想情報が混入して置き換わり、しかもそれが実体を正確に反映している、といった活性である。山城は、自分自身のこうした活性化に「〈仮想既知覚〉」という概念道具を創り対応させている。

以上は、私の個人的体験であるが、実は「〈仮想既知覚〉」が発揮された動かぬ証拠が、誰でもわかる形で残されている。山城こと大橋は、1987年に『科学基礎論研究』という科学哲学分野の学術雑誌に「プログラムされた自己解体モデル」という論文を發表した。そこに、そのモデルを地球生命に当てはめた仮想的な概念図(図1)が掲載されている。この現象は、その後15年に及ぶ地道な研究の蓄積により、2002年に鮮明な写真として捉えられ実在が証明さ

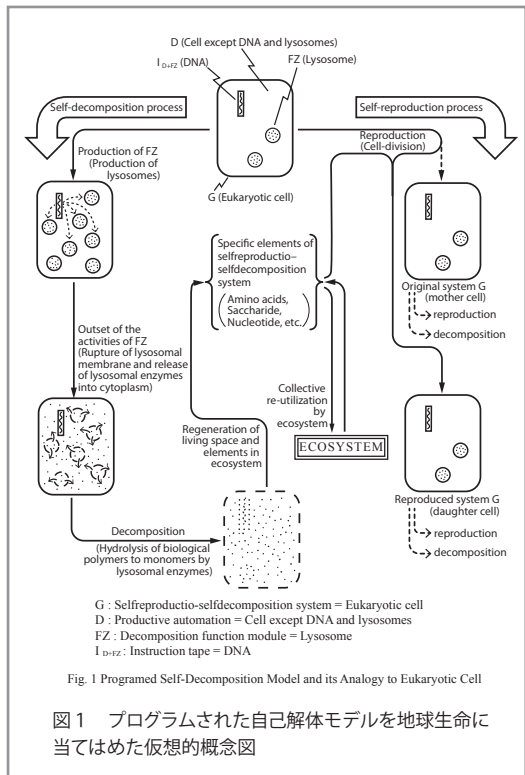


図1 プログラムされた自己解体モデルを地球生命に当てはめた仮想的な概念図

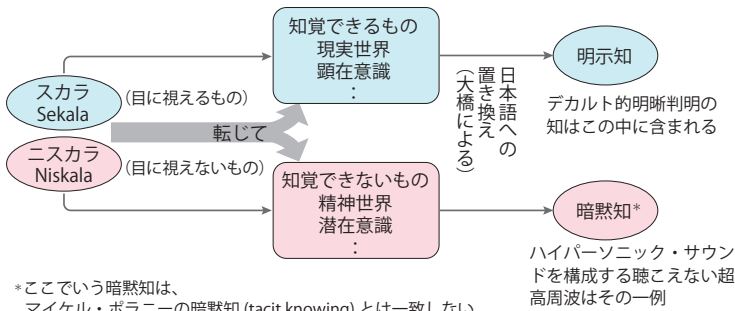
れたのだが、驚嘆するのは、ここに写し出された姿が、実験開始より遙か以前に描かれたこの概念図と寸分違わぬものであったことである(岩波書店雑誌『科学』9月号参照)。科学研究では、仮説を立て、それを実験で検証し、その結果で仮説を修正するというプロセスを延々と繰り返すことで徐々に真実へ近づいて行くのが一般的である。しかし、ここに示された概念図は、30年以上を経た現在においても一切の修正が必要なく、最初からまるで写真を正確に模写したかのように描かれているのである。

まさに鳥肌ものである。以上は、科学領域の事例であるが、まもなく芸術領域においても、山城の「〈仮想既知覚〉」の成果を誰でも実感できるようになることを予告しておきたい。詳細は次稿のAKIRAKRIMASタールの紹介に譲るが、この論考を書くに先立ち、私は山城によって刷新された音楽を試聴する機会に恵まれた。その折、これまで個人的にはもはや改善

の余地がないと感じていた音質が、次元の違うものに変貌し飛翔していたことに戦慄すら覚えたのである。

先の論考では、こうした山城の不思議な活性について、地球生命の脳の進化の最前線にあるホモ・サピエンスの非言語脳をフルに使った情報処理なので、本人も周りも言葉で捉えて明瞭判明に理解することができないのではないかと考察したが、これをさらに深めてみたい。それをさらに深めてみたい。それがあたり、山城が著書『ハイパーソニック・エフェクト』のむすび

「知覚でき、意識で明瞭に捉えることができる顕在的なもの」(「スカラ」と、「知覚できず、意識で捉えることができない潜在的なもの」(「ニスカラ」)の両方から世界が構成されているとする二元論的コスモスが想定されている。山城は、こうした明示的な「スカラ」を制御するの



\*ここでいう暗黙知は、マイケル・ボラニーの暗黙知 (tacit knowing) とは一致しない

図2 バリ島の二元論的コスモロジー

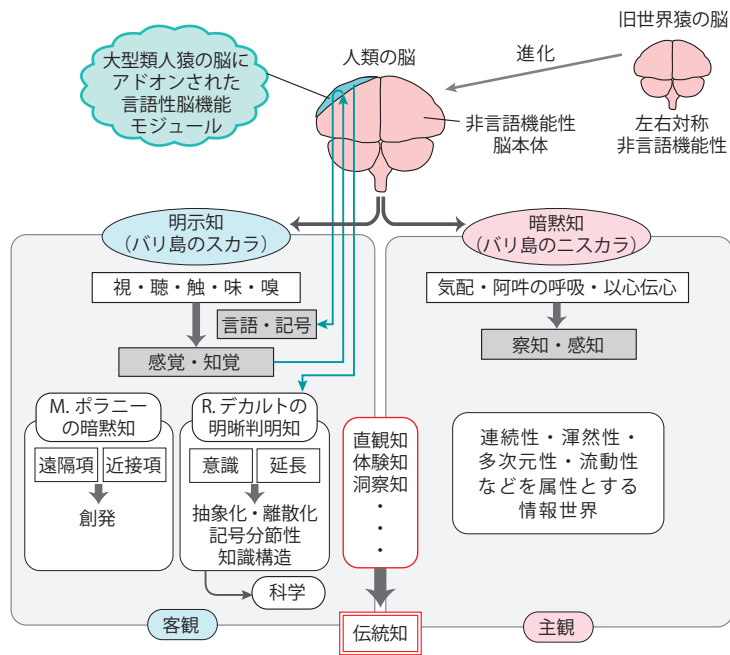


図3 大橋によるバリ島の二元論的コスモロジーを支える脳機能モデル

を提唱している（図3）。そして、「スカラ」と「ニスカラ」、すなわち客観の世界と主観の世界とを結びつけバランス良く制御することにより、ハイパーソニック・エフェクトの発見を導いたと、自ら著書の中で振り返っている。確かにその通りであろう。

しかし、「スカラ・ニスカラ」をバランス良く制御するのは、いわばバリ島文化という脳機能を

体系の力であり、その体系を学びつつ脳を鍛えれば、ある意味だれでも到達できるものと言える。これに対して、「未知」と「既知」とが置き替わり、しかも「未知」であるはずの部分が「既知」のごとく正確に実体を反映している「仮想既知覚」を生み出すためには、曖昧で漠然とした非言語脳の働きを、明晰判明な言語脳の働きに直結して昇華させる何らかの脳機能が必要となる。搭載されているという証拠は今

そこらもない。《仮想既知覚》を具えた山城の脳を、生理―病理、あるいは進化―退化の軸のどこに位置づけるかは、大きな課題であるが、少なくとも、経験や訓練、文化的洗練などでは到達することのできない特異性をもったものであるとも言えるであろう。

こうした三次元の世界を四次元から眺めるような山城の《仮想既知覚》の存在を視野に収めると、実はそれが平素から不可視のレベルでミクロに発揮されることによって、芸能山城組は生き延びてきたということを、私を含む山城の弟子たちは認めざるを得ない。ご承知の通り、芸能山城組は規約も綱領もたらず、組織内の序列も曖昧で、創流当時は「向かい風の曠野を一人ゆく」「無法の徒党」とすら呼ばれていた。そんな私たちが、45年も潰れずに生き延びて来られたのは何故か？それは、組織運営のあらゆるミクロな局面で、《仮想既知覚》脳機能レイヤーを搭載した頭の山城が、荒れ狂

---

# 業績リスト

---

## 受賞 (抜粋)

### 国際賞

- ・ダルマ・クスマ勲章 〈インドネシア・バリ島の文化勲章〉(山城祥二,1992)
- ・グルジア国際文化賞(1990)
- ・中山賞大賞 〈生命科学の国際賞〉(大橋 力,2000)
- ・ECAL ベスト論文賞(前川督雄,2011)
- ・NHK テレビ音楽劇「虎落笛」: イタリア賞・イタリア放送協会賞 (1976)
- ・テレビCM「クリネックス」: 国際放送広告賞(1978) クリオ賞(1979)
- ・ラジオCM (ソニー): クリオ賞 (1980)
- ・ベストソリスト賞 〈世界合唱音楽祭 (旧ソ連邦)〉 (大滝 伸) (1988)
- ・LD「アキラ／サウンド・クリップ by 芸能山城組」: A V A グランプリ (1988)
- ・Suksma Bali Award 〈バリ島のサステナビリティに貢献〉 (大橋 力,2019)

### 国内賞

- ・ラジオCM (ソニー): ACC 賞ほか (1979)
- ・第5弾LP「芸能山城組ライブ」: 日本レコード大賞企画賞(1979)
- ・映画「AKIRA」の音楽: 日本アニメ大賞最優秀音楽賞 (1989)
- ・旅の文化賞 (1994)
- ・日本バーチャルリアリティ学会論文賞 (1999)
- ・木村重信民族芸術学会賞 (大橋 力,2004)
- ・第22回日本プロ音楽録音賞ハイレゾリューション部門「審査員特別賞」(大橋 力,2015)
- ・第23回文化庁メディア芸術祭 功労賞 (山城祥二,2020)

## 音楽・映像作品 (抜粋)

- 芸能山城組オリジナルCD・LP (JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント)
  - ・「恐山／銅之劍舞」(1976)・「地の響」(1976)・「やまと幻唱」(1977) ・「黄金鱗讃揚」(1978)・「芸能山城組ライブ“開かれた合唱”十年の展開」(1979) ・「少年達への地球讃歌」(1980)・「シルクロード幻唱」(1981) ・「ビザンチンの響」(1981) ・「アフリカ幻唱」(1982) ・「輪廻交響樂」(1986)・「AKIRAオリジナル・サウンド・トラック」(1988)・「Symphonic Suite AKIRA (交響組曲アキラ)」 (1988) ・「芸能山城組入門」(1988)・「翠星交響樂 Ecophony Gaia」(1990) ほか全 16 タイトル
- JVC ワールドサウンドズ (JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント) 企画・構成 山城祥二, 録音・解説・写真 大橋 力全 101 タイトル
- DVD／Blu-ray ディスク
  - ・「AKIRA DVD SPECIAL EDITION」の音楽, バンダイビジュアル (DVD, 2001)
  - ・ハイパーソニック Blu-ray 「AKIRA」バンダイビジュアル (2009)
- ハイレゾリューションオーディオ配信コンテンツ [ハイパーソニック・ハイレゾ音源 by オオハシ・ツトム] (e-onkyo、VICTOR STUDIO HD-Music 他から配信)
  - ・第一弾:「恐山／銅之劍舞」・「チベット密教 極彩の響き」・「超絶のスーパーガムラン ヤマサリ」・ハイパーソニックオルゴール「トロイメライ」(2014)

- 第二弾：「輪廻交響楽」・「ブルガリアン・ポリフォニー(I)」・ハイパーソニックオルゴール「卒業写真」(2015)
- 第三弾：「交響組曲 AKIRA 2016」(2016)
- 芸能山城組オリジナル LP (米国 Milan Records)  
「Symphonic Suite AKIRA」LP2 枚組 (山城祥二監修による DSD11.2MHz のハイパーハイレゾ音源を使用) (2017)
- AKIRA 4K リマスターセット (4K ULTRA HD Blu-ray & Blu-ray) (バンダイナムコアーツ (2020), NBC ユニバーサル・エンターテインメントジャパン(2022))

## 著作 (抜粋)

- 群れ創り学, 山城祥二, 1981 年, 徳間書店
- 情報環境学, 大橋 力, 1989 年, 朝倉書店
- 音と文明—音の環境学ことはじめ, 大橋 力, 2003 年, 岩波書店
- 脳の中の有限と無限, 『科学』, 大橋力, 2006 年—2015 年, 年 4 回連載, 岩波書店
- ハイパーソニック・エフェクト：超高周波が導く新たな健康科学, 『科学』2013 年 3 月号, 大橋 力他, 岩波書店
- 音楽・情報・脳, 仁科エミ・河合徳枝編著, 2013 年, 放送大学教育振興会
- ハイパーソニック・エフェクト, 大橋 力, 2017 年, 岩波書店
- 利他の惑星・地球, 『科学』, 大橋力, 2019 年 4 月号～2022 年 3 月号連載, 岩波書店

## 論文 (抜粋)

- プログラムされた自己解体モデル, 大橋他, 科学基礎論研究, vol. 18, 21-29, 1987.
- Inaudible high-frequency sounds affect brain activity: A hypersonic effect, Oohashi T, et al., Journal of Neurophysiology, 83: 3548-3558, 2000.
- Catecholamines and opioid peptides increase in plasma in humans during possession trances. Kawai N, et al., NeuroReport, 12: 3419-3423, 2001.
- Artificial Life Based on the Programmed Self-Decomposition Model: SIVA, Oohashi T, et al., Journal of Artificial Life and Robotics, 5: 77-87, 2001.
- Electroencephalographic measurement of possession trance in the field, Oohashi T, et al., Clinical Neurophysiology, 113: 435-445, 2002.
- The role of biological system other than auditory air-conduction in the emergence of the hypersonic effect, Oohashi T, et al., Brain research 1073-1074: 339-347, 2006.
- Frequencies of inaudible high-frequency sounds differentially affect brain activity: positive and negative hypersonic effects, Fukushima A, et al., PLoS One, 9, e95464, 2014.
- Electroencephalogram characteristics during possession trances in healthy individuals, Kawai N, et al., Neuroreport, 28, 949-55, 2017.
- Induction of prolonged natural lifespans in mice exposed to acoustic environmental enrichment, Yamashita Y, et al., Sci Rep., 8, 7909, 2018.
- Positive effect of inaudible high-frequency components of sounds on glucose tolerance: a quasi-experimental crossover study, Kawai N, et al., Scientific Reports, 12, Article number: 18463, 2022.